



2017年3月31日 第47号

JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第60回日本手外科学会 学術集会の開催にあたって

会長 平田 仁
(名古屋大学医学部手外科)

目 次

- 第60回日本手外科学会学術集会の開催にあたって
- 理事長からのニュースレター
- 物故会員への追悼文(中川正先生)
- 物故会員への追悼文(伊丹康人先生)
- JSSH-ASSH Traveling fellow 報告記
- 2016年度JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記
- 委員会報告
- お知らせ
- 編集後記

第60回日本手外科学会を担当させていただきます名古屋大学手外科の平田です。名古屋大学が本会を担当させていただくのは四回目であり、大変光栄なことと存じています。名古屋の地にご参集いただくすべての学会員の皆様に日頃の研究成果を存分にご発表いただき、互いに研鑽を積み、また、旧交を温めていただきたいとの思いから現在も教室をあげて鋭意開催準備を進めています。

沖縄で開催された第57回学術集会の代議員会において学術集会会長の指名を受けて以来3年余りをかけて開催準備を進めてきました。今回が日本手外科学会創設60年という節目での開催に当たることを強く意識して、後々にターニングポイントとなったと評されるような個性的で先進的な学術集会を目指しています。このため多少学会編成が複雑となり、プログラムの準備などに遅れを生じて会員にご迷惑をおかけしていることをまずはお詫び申し上げます。

演題募集は昨年9月11日から11月1日にかけて行いましたが、私どもの想像を遥かに上回る800題を超える応募がありました。査読委員の先生がたに厳正なるご評価をいただき、例年並みの採択率を適用して660題ほどを採用させていただきました。いずれも非常に内容の濃い秀逸なご研究であり、存分に研究成果をご発表いただきたいとの思いから連日10会場を用意して多彩な企画を盛り込むこととしました。

今回のテーマは「新たなフロンティアへの挑戦」としています。国内外から世界をリードする研究者・手外科医をお招きして10の特別・招待講演を用意しました。そこでは末梢神経再生の種特異性、再生医療を活用するneuro-prosthesis、ヒトでの同種組織移植、先天異常の分子機構、など近未来に手外科医療を一変させる最新の研究はもちろんのこと、innovationの産み方、医学教育、あるいは医療機器開発といった我々が今日直面している現実的な話題まで幅広く取り上げて講演をしていただくこととしました。教育研修講演は専門医制度の充実を目指して若手を中心に38名

の会員に依頼して、19のホットなテーマに関してEBMを重視した教育的な講演を準備しました。企画演題に関しては従来型のシンポジウム、パネルディスカッション(それぞれ9セッション)に加えて、若い力の台頭を期待して主に45歳以下の会員に構想からシンポジストの選考までほぼすべて任せて編成したyoung leaders symposiumも9つ用意しています。ディベートはチャレンジングな状況をテーマに当代を代表する専門家が互いの主義・主張をぶつけて熱く討論する華やかな企画ですが、今回は診断から後療法までを俯瞰した討論を期待して、専攻医・指導医・ハンドセラピストでチームを編成していただき施設間でバトルを展開していただくこととし、13のテーマを設定しました。これら企画演題はすべて日本ハンドセラピー学会との共催企画とし、医師だけでなく手外科医療に関わるすべての人が学習し、楽しめるものとしたしました。今回初めて登場する企画としてはいずれも学会初日に展示会場で全員懇親会の中で開催されるラウンドテーブルとビデオコンペティションがあります。前者はテーマに関連する製品を有する企業の展示ブースの軒先をお借りして開催される企画です。若手医師が15分以上の持ち時間でピンポイントに診断・治療のコツを紹介し、聴衆と同じ目線で討論する聴衆参加型企画であり、後者は学術集会の1週間前からオンライン上で公開されるビデオ発表のアピールを持ち時間1分で次々に行うという奇抜な企画です。後者では聴衆の投票により優秀演題を選考します。

学術集会と並行して開催する企画も複数用意しました。21世紀に入りロボット工学や人工知能、遺伝子解析、再生医療などの革新的技術が急速に進歩し、それに伴い社会構造や我々の生活そのものが大きく変化し始めています。この状況を多くの識者が「人類は第4次産業革命の入り口に差し掛かった」と指摘しています。その波は当然手外科医療にも及ぶはずであり、世界では先陣争いがすでに始まっています。そこで国内外からそれぞれの分野で世界をリードする研究者に一堂に会していただき学術集会二日目にIntelligent Functional Reconstruction of the Handをテーマとする国際シンポジウムを開催することとしました。未来の運動機能再建外科の創出を目指す学際的かつ創造的な討論をぜひ楽しんでいただきたいと思います。60年の節目を意識した企画も2つ用意いたしました。一つは26日の代議員会に際して催される「歴代理事長による座談会」であり、いまひとつは会長招宴の前に開催する中村蓼吾先生と山内裕雄先生による記念講演会です。これまでにご紹介したように2日の学術集会のキャパシティを超える盛りだくさんな企画を立てたためいずれもご参加いただける会員を限定した開催とせざるをえず、他の皆様には大変申し訳なく、心よりお詫び申し上げます。しかし、これらの企画に関してはビデオを作成し、オンライン上で全会員にご覧いただけるようにするだけでなく、学会2日目には展示会場でも放映をする予定です。

今回の学会では理事会のご許可を頂き従来配布していた冊子体での抄録集を廃止し、抄録もすべてオンライン上で提供することとなりました。できる限り事前に多くの情報を会員のお手元にお届けしたいと考え、こちらも理事会の同意をいただいて、2月15日より全会員に学会のハイライトをお知らせするウィークリーメールマガジンを配信しています。また、学会当日も抄録こそありませんが、演題タイトルなどを含む演者情報などを盛り込んだ80ページほどのプログラム集はご提供いたします。こちらは各演題の前にQRコードが付いており抄録を携帯端末や携帯電話で閲覧していただくことができます。従来との違いから戸惑われるケースも多々あるとは存じますが、ネット活用の拡大は世界の潮流であり、何事においても常に先頭を走り続けてきた手外科学会ですので、この面でも他に先んじたいとの会長の思いから決断したものですのでご容赦いただきたいと思います。

学術集会開催まで余すところわずかとなっていますが、皆さんに心おきなく第60回学術集会を楽しんでいただくことを目標に日々努力を重ねています。みなさんと共有する2日間をとっても楽しみにしていますし、皆さんにも新たなものに接するワクワク感を持って名古屋に御参集いただきたいと思います。

理事長からのニュースレター



日本手外科学会
理事長 矢島 弘嗣
(市立奈良病院)

会員の皆様、日頃から日本手外科学会の運営にご協力いただいていること、心からお礼申し上げます。昨年を振り返りますと、米国手外科学会からゲスト学会として日本手外科学会が招待されたことが理事長としての私には最も大きなイベントでした。皆様のご協力を得て、日本からは144名が参加し、102題(口演5題、ポスター97題)が採択されました。日手会会員の参加者の多さに対してジョーンズ会長が何度も感謝の意を表しておられました。そして開会式において会長から記念のトロフィーをいただきました(写真)。このトロフィーは名古屋での総会の折に平田会長に頼んで展示いただけることになり、是非とも皆様には見ていただきたいと思っております。

さて専門医のことですが、皆様ご承知のごとく昨年の夏に日本専門医機構の執行部役員が総入れ替えになりました。本来ならば昨年秋にサブスペシャリティ領域専門医の再認定を受ける予定でしたが、日本専門医機構による基本領域学会の認定が遅れたことにより、現在放置されている状態です。ただ昨年12月に専門医制度新整備指針が出されました。これは最初に出された指針の改訂版ではなく、全く新しい形の整備指針として開示されたわけです。その内容は日本専門医機構のホームページから見ることができますので、専門医あるいは専門医をめざしておられる先生方は一度目を通していただきたいと思っております。なお前回と大きくかわっていることは、1) 基本領域学会がサブスペシャリティ学会と協同して、サブスペシャリティ学会専門医検討委員会を構築すること、2) 研修プログラム制ではなく研修カリキュラムを導入してもよい、3) 研修施設群の形成は必須ではない、の3つです。すなわち前回のヒアリング等で指導されたことに比べ、かなりハードルが下がったものと感じられます。これを踏まえて、まず日本整形外科学会そして日本形成外科学会との専門医検討委員会を立ち上げる必要があります。できれば現在ある専門医制度委員会をベースに整形外科学会および形成外科学会から委員を派遣していただき、専門医制度委員会委員とで専門医検討委員会を構築し、サブスペシャリティ領域専門医についての整備を進めていく予定です。専門医制度の今後につきましては委員会の委員だけでなく広く会員の皆様方からご意見を伺いたいのですのでよろしくお願い致します。もう1つ代議員の選挙についても、定年制も含め現在定款等検討委員会で議論していただいております。できれば次回の理事会で結論を出し、総会で報告したいと考えております。これに関してもご意見があれば私をはじめどの理事でも結構ですので、ご意見をお伝え願えれば幸いです。

その他検討しなければならない問題はまだまだ山積みの状態です。できる限りこなしていきたいと考えておりますので、どうか今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



図 ASSHからのトロフィー

物故会員への追悼文

中川 正 先生を偲んで

中日病院 名古屋手外科センター長 中 村 蓼 吾

名古屋大学名誉教授中川正名誉会員が平成28年9月21日に老衰にて永眠されました。大正8年のお生まれで97年の人生を、思うことを強く主張され、力一杯活躍してまっとうされました。ここに門下生、そして日本手外科学会の一員として先生の御冥福を祈る次第です。

第21回日本手の外科学会は、昭和53年6月15、16日に名古屋市民会館において中川正会長のもとで開催されました。当時、手の外科専門診療を始めて10年であった三浦隆行講師が事務局長役を務めました。幸い多数の会員の協力もあり、Harold Kleinert先生とHanno Millesi先生をお招きすることができました。屈筋腱損傷の治療と末梢神経損傷に対する神経移植術の当時における最先端の講演は参加者に相当のインパクトがありました。学会運営においては展示にも力をそそぎ、日本手の外科学会初の展示討論を行っています。

シンポジウムには「伸筋腱の病態と治療」と「手の先天奇型の分類」をとりあげ、それぞれ田島達也先生と津下健哉先生が座長を努められ、活発な討論ができました。このように立派で成果の多い学会を成功させた中川正会長の見識に敬意を払うとともに、故人にいろいろとご協力いただいた会員の皆様に故人になり代わり厚く御礼申し上げます。

中川正先生は大阪のご出身ですが、名古屋大学医学部へ入学し昭和17年に卒業されました。太平洋戦争中のこととて海軍軍医に任官されました。座談に興が乗ると戦艦武蔵乗艦の頃のお話がよくできました。その後昭和21年に創設間もない大阪大学医学部整形外科教室に入局され、清水源一郎教授の指導を受けられました。昭和24年和歌山県立医科大学講師へ転出し、同大で昭和25年に助教授に任じられました。さらに昭和34年に和歌山県立医科大学教授に就任しました。昭和39年に名古屋大学医学部教授を拝命しました。名古屋大学在任中昭和47年より昭和51年まで医学部附属病院長を務められました。医学部を定年後、昭和58年より中部労災病院長を務めています。

先生の学問上の業績は先天性股関節脱臼(とくにover head traction法)、変形性股関節症の治療など多岐にわたりました。特筆すべきは、骨・軟骨代謝に興味を持たれ、ムコ多糖、コラーゲンについての生化学的研究を推進されたことです。今は日本整形外科学会、日本形成外科学会とも基礎学術集会有り、このような基礎的研究が日の目を見る環境があります。しかし、昭和40年代は日本整形外科学会は臨床的研究がほとんどで、あるいは国際的にも整形外科で基礎研究とは何んですかと言われかねない時代でした。指を差す人さえ居る中、信念を曲げず基礎研究を行い、今日の基礎学会の礎石を作られました。この点はもっと評価されてよい先生です。

会員の皆様の日頃の名古屋大学手外科に対するご厚情と日手会ニュースに追悼文を載せていただけることを感謝いたします。

伊丹 康人 先生 追悼文

聖マリアンナ医科大学 別府 諸 兄
(公財) 日本股関節研究振興財団



伊丹康人先生は平成28年12月22日逝去されました。享年102歳。葬儀は東京慈恵会医科大学整形外科学講座と伊丹家との合同葬で東京都青山葬儀所にて営まれました。

昭和14年に東京慈恵会医科大学を卒業され、同大学整形外科学教室に入局されました。しかしその後直ちに軍医として現在の中国南部、ベトナムなどで勤務され、終戦後の昭和21年に帰国されました。最後の1年は捕虜生活など様々な辛い経験をされ、多くの死と直面したことを通して、医師として勉強をすること、努力することを厭わない決心をされました。そして、昭和25年に講師、昭和27年に助教授、昭和41年同大学整形外科第3代主任教授になられました。教

室員の学内・学外・海外留学を積極的に進め、整形外科の専門領域を担う人材の育成に努められました。特に手外科に関しましては、第4代主任教授になられた故室田景久先生をCampbell Clinicの故Dr. Milfordのもとに留学させ、慈恵医大整形外科の手外科研究班を創設しました。そして、昭和53年に大久保康一先生、昭和55年に富田泰次先生を米国Kentucky州LouisvilleのKleinert - Kurtz Hand Surgery Associatesに留学させ、最新の手外科、マイクロサージャリー並びに遊離組織移植術を教室に導入し、手外科の進歩に貢献されました。昭和49年第17回日本手外科学会会長、同年第1回日米合同手の外科会議議長となりました。昭和51年に神奈川総合リハビリテーション病院院長を兼務。昭和52年日本整形外科学会会長、昭和53年SICOT'78 Kyotoの副会長を歴任されました。昭和55年に定年退職され日本整形外科学会名誉会員になられました。この間、昭和49年～58年の第1回から第10回までの日本股関節学会の会長を務められました。その後、先生は私財を投じて、昭和62年には財団法人日本股関節研究振興財団を創立されました。平成23年に内閣府より公益財団法人として認可され、股関節の研究に対する支援、普及啓発運動、股関節の海外研修に対する支援、運動器健康寿命延伸活動、股関節研究セミナー、股関節市民フォーラムなどを長年にわたり行っています。その結果として、創立以来30年間にわたり総額1億5千万円の研究支援を行ってまいりました。

その間、財団の活動のみならず診察も継続され、気が付くと先生は、90歳代に入られていました。「自分の身体は自分で守る」という言葉をご自分に言い聞かせ、足腰を鍛え、食事に気を付け、規則正しい生活を続けられていました。しかし、一番好きだったのは、あの慈恵医科大学整形外科の特徴である前掛けの白衣でした。100歳を過ぎてても白衣を着て、リハビリ室で患者さんを診ておられました。本当に医師という仕事が好きでした。私共もこのような姿をみていると、寿命というものが万人にくるものであるのを忘れておりました。年を取られるごとにむしろ穏やかに静かに過ごされ、まさに枯れていかれました。そして、ちょっと体調を整えて頂こうと入院した母校の病院で、3日間寝ただけでスーッと旅立ってしまわれました。母校では、多くの同窓と関係者、そして先生がいつも見上げていた東京タワーに見守られての出立でした。102歳で先生最後の本「病で死ぬな、枯れて死ぬ」の考えを実践した幸せな最後だったと思います。

JSSH-ASSH Traveling fellow報告記

吉井 雄一

東京医科大学茨城医療センター

2016年9月25日から10月20日までJSSH-ASSH Traveling fellowのプログラムに参加させていただきました。日本大学の長尾聡哉先生とアメリカ国内の6施設を訪問しました。例年、日本からのフェローは独自に訪問先を選択して旅程をたてていたようですが、今年からASSHの指定する施設に他国のフェローと一緒に訪問するプログラムになったようで、旅程の半分ほどを韓国、台湾、シンガポールのフェローとともに過ごしました。

最初の訪問地であるテキサス大学オースティン校では、Dr. David Ringを訪問しました。テキサス州は土地柄、メキシカンアメリカンの患者が多く、スペイン語での診療も多く行われていました。Dr. Ringは2016年の1月から現在の勤務地に異動したようで、これから診療体制を構築して行こうとしている印象を受けました。

9月28日からは、ASSHが始まり各種のInstruction courseや口演発表など拝聴しました。会期中Traveling fellowのランチョンがあり、15カ国16人のフェローによる短いプレゼンテーションと自己紹介がありました。私は現在行っている骨折治療の3D術前計画に関する研究のプレゼンテーションを行いました。発表に対してASSHのcommittee memberに直接意見をいただくという大変貴重な機会でした。



ASSHのwelcome receptionにて。写真左より琉球大学金谷文則先生、長尾聡哉先生、Dr. Ring、筆者。

10月3日からは、デューク大学のDr. David Ruchを訪ねました。Hand divisionには、Dr. Ruchを含めて4人のスタッフと1人のフェロー、3人のレジデントがいました。医学部棟の解剖学教室では、整形外科レジデントは週一回新鮮凍結屍体を使って、手術解剖の勉強をするとのことで、充実したレジデント教育体制が印象に残りました。



Duke大学の庭園にて。写真左より長尾聡哉先生、Dr. Jeong（韓国）、Dr. Mala（シンガポール）、Dr. Ruch、筆者、Dr. Cheng（台湾）

10月6日からはミシガン大学のDr. Kevin Chungを訪問しました。Dr. Chungの手外科教科書にはきれいな術中写真が多く掲載されていますが、手術中に何度も手をとめ手術のプロセスを細かく写真に収めていました。訪問中にDr. Chungより幾度となく試問形式で質問され、フェロー教育に熱心な印象を受けました。



ミシガン大学Research Complexにて。写真左より長尾聡哉先生、Dr. Jeong（韓国）、Dr. Mala（シンガポール）、筆者、Dr. Cheng（台湾）

全体を通して、アメリカの医療は分業化がすすんでおり、様々な職種の人が各部署に配置されて医療を円滑に進めている印象を受けました。医療水準に関しては、日本も引けを取らないと感じることも多くありましたが、新しいことを生み出す体制としては、アメリカのシステムは合理的なように感じました。今回、体験できた各施設の利点を日本の医療制度と融合してどのように展開していくか、これからの私の課題と考えています。

最後に、このような機会をいただきました日本手外科学会国際委員会の諸先生方、訪問先でお世話になりました名古屋大学山本美智郎先生、藤原祐樹・那沙先生、岡山大学斎藤太一先生、昭和大学久保和俊先生、福岡大学村岡邦秀先生、長旅をともした日本大学長尾聡哉先生に厚く御礼申し上げます。

2016年度JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記

長尾 聡 哉

みつわ台総合病院／日本大学 整形外科

前述のように、東京医科大学茨城医療センター 整形外科の吉井雄一先生とともに2016年度JSSH-ASSH Traveling Fellowとして米国の医療施設を訪問する機会を頂くことができました。諸事情により吉井先生が一足先に帰国され、最後の10日間は一人旅となったのをよいことに、Buenos Airesで開催されたIFSSH Triennial Congressにも参加してしまいました。Fellow報告の後半と併せて報告させていただきます。

● Loyola University Hospital (Chicago, IL): 10/10～11

先天異常で高名なLight先生がHostで、外来+病院見学・手術見学が各1日でした(図1)。ご自宅でのDinnerにも招待していただきました。Light先生の愛情に溢れた小児整形外科外来やレジデントへ教育する姿勢に感銘を受けました。



図1：Light先生（右から2人目）・Hand Fellowと手術室にて

● Mayo Clinic (Rochester, MN): 10/13~14

2日間とも朝のカンファレンスに参加した後、手術を見学しました(図2)。Faculty数名の手術を見学しましたが、中でもBishop先生・Shin先生・Dennison先生のcollaborationによる舟状骨近位偽関節に対する大腿骨外顆血管柄付遊離骨移植術が印象的でした。吉井先生の引率で研究室などの見学もできました。



図2: Bishop先生(右端)・International Visiting Fellowと手術室にて

● Stanford University Hospital (San Francisco, CA): 10/17~18

昨年 of 日本手外科学会でBunnell Fellowとして訪日されていたYao先生がHostでした(図3)。外来見学・手術見学が各1日のスケジュールで、Yao先生の精力的な外来・手術を目の当たりして大いに刺激を受けました。特にTightRope[®]を使用した母指CM関節形成術の手際の良さにはびっくりしました(所要時間:約30分!!)。



図3: Yao先生(右から2人目)・村岡邦秀先生(福岡大学整形外科;左端)と手術室にて

● Miami Hand Institute (Miami, FL): 10/20~21

吉井先生と別れたのちにMiamiを訪れました。HostのOrbay先生は空港までの送迎だけでなく、自宅のGuest Roomへの宿泊もさせて下さいました。初日は病院見学ののち、開発中のimplantのcadaver studyをお手伝いし、2日目は手術に助手として参加しました(図4)。特に、Orbay先生が開発された本邦未承認の橈骨遠位端骨折掌側ロックングプレートであるGEMINUS®の手術に日本人で初めて手洗いして参加できたのは非常に印象深い思い出となりました。



図4：Orbay先生（右から2人目）・スタッフと手術室にて

● IFSSH Triennial Congress (Buenos Aires, Argentina): 10/24~28

Miamiから直行便で約9時間南下し、Buenos Airesにたどり着きました。アルゼンチン手外科学会の歴史に関する展示に見入り、世界各国の著名な手外科医の講演を拝聴しただけでなく、この旅でお世話になった先生方の大半と再会することができました。ついでに、イグアスの滝も堪能してしまいました。

約5週間、総飛行距離約50,000km(おそらくTraveling Fellow史上最長!?)に渡ってアメリカ・アルゼンチンを旅し、国内では得ることができないであろう貴重な経験を数多くさせていただきました。貴重な機会を与えて下さった日本手外科学会理事長 矢島弘嗣先生、国際委員会 柴田実アドバイザー(前担当理事)、柿木良介担当理事、和田卓郎委員長をはじめ委員の諸先生方、推薦して下さいました名古屋掖済会病院 渡邊健太郎先生、日本大学整形外科 徳橋泰明主任教授、長岡正宏教授、渡航中お世話になった名古屋大学整形外科 山本美智郎先生、藤原祐樹先生・那沙先生、岡山大学整形外科 斎藤太一先生、昭和大学整形外科 久保和俊先生、福岡大学整形外科 村岡邦秀先生、留守を預かって下さったみつわ台総合病院整形外科 有菌行朋部長をはじめスタッフの皆様、そしてこの旅の相棒である吉井雄一先生にこの場をお借りして深謝いたします。

委員会報告

財務委員会

委員長 大江隆史

当委員会の構成メンバーは昨年度から1名が交代し、担当理事である三上容司先生(横浜労災病院)のもと委員長の大江(NTT東日本関東病院 整形)、内山茂晴先生(信州大 整形)、楠瀬浩一先生(東京労災病院 整形)、田尻康人先生(都立広尾病院 整形)、西脇正夫先生(川崎市立病院 整形)と清川先生から交代となった垣淵正男先生(兵庫医大 形成)からなる委員、アドバイザーである川端秀彦先生(大阪府立母子保健総合センター 整形)、小川正則公認会計士で学会の財務に関する業務を行い、事務局では中尾氏と、鷺見氏から交代となった林氏が担当しています。財務委員会は東京都千代田区麴町のコングレ東京本社内の会議室で行い、対面で参加できない先生方にはwebでの参加をお願いしています。平成28年の第1回を昨年3月18日に、第2回はWebで7月7日から14日の間、第3回を12月13日に開催しました。

第1回では27年度の決算と28年度予算を理事会へ報告し、4月20日の代議員会で承認されました。

第2回では平成28年度の収支の経過などが報告され、代議員総会の費用の増加について質疑があり、受付の人件費が学術集会での負担でなかった旨の説明がありました。

第3回では11月末での収支状況が報告されました。収入については会費収入などが順調に推移しており秋季教育研修会の参加の増加と合わせ予算より約500万円に増加となる見込みです。支出については、事業費が約1200万円減少する見込みである旨が示されました。その理由としては1) e-ラーニング準備費とweb 登録システム開発費用が執行されておらず、年度末までも事業の進捗の予定がないこと、2) 出版関連で新規の手外科シリーズが作成されていないこと、3) 専門医関連費用が専門医制度の遅れからわずかしか執行されていないためであり、1) と3) については昨年と同様でした。管理・事務費については概ね予定通りに推移しています。したがって、収支としては約1700万円の黒字となる予定です。

平成29年度予算については各委員会からの事業計画では特記すべき新規大型案件なく、来年度は解剖手技セミナーが予定されている年度であること、e-ラーニングのシステムが稼働する予定であること、などから前年度よりやや多い事業費5100万円余を計上することとしました。収入について、29年度は専門医の更新は通常にもどり、管理を本年度並みとし、仮に事業がすべて行われるとすると、約700万円の赤字となる見込みです。

教育研修委員会

委員長 金谷耕平

平成28年度教育研修委員会のメンバーは、担当理事に砂川融先生、委員に射場浩介、大野義幸、坂本相哲、島田賢一、田中克己、中村俊康、村田景一各先生（五十音順）と委員長に金谷耕平で構成されております。

当委員会の主たる活動内容は、春期ならびに秋期教育研修会の運営です。第22回春期教育研修会は、アステラス製薬株式会社の協力を得て、第59回学術集会の翌日の4月23日（土）に広島国際会議場で開催しました。6題の講演を企画し、参加人数は194名でした。第22回秋期教育研修会は、8月27日（土）・28日（日）に開催しました。会場はアクトシティ浜松を使わせていただき、旭化成ファーマ株式会社の協力を仰ぎました。参加人数は178名で10題の講演と1題のランチョンセミナーを企画しました。また、1日目の講演後に症例検討会を開催しています。いずれの研修会でも活発な討論があり、ほとんどの参加者が最後の講演まで熱心に研修されておりましたので、非常に実り多い研修会であったと自負しています。講師の各先生におかれましては、ご協力いただき誠にありがとうございました。この場を借りて心から御礼申し上げます。平成29年度は、第23回春期研修会を第60回学術集会の翌日の4月23日（土）に名古屋市で、第23回秋期研修会を9月9日（土）・10日（日）に札幌市で開催する予定です。

また、平成29年度は、第3回カダバーワークショップの開催年でもあります。今回は、9月7日（木）・8日（金）の2日間に札幌医大解剖学教室で行われる予定です。例年とは異なり平日開催となりますが、そのあとの秋期研修会も札幌開催ですので、両方を受講された場合には、4日間どっぴりと手外科研修に浸ることができます。ぜひ、カダバーワークショップと秋期研修会を合わせて受講いただくことをお勧めします。教育研修委員会では、できるだけ皆様の意見を取り入れながら、よりよい研修システムの構築に全力を注いでおります。今後ともご支援を宜しくお願い申し上げます。

編集委員会

委員長 谷口泰徳

編集委員会の活動報告をさせていただきます。編集委員会の担当理事は坪川直人で、アドバイザーは正富隆です。現編集委員は石垣大介、笠井時雄、河村健二、五谷寛之、佐藤和毅、鈴木克侍、関谷勇人、高原政利、鳥谷部荘八、長岡正宏、中道健一、西田圭一郎、西田淳、信田進吾、原友紀、藤原浩芳、堀井恵美子、山下優嗣、横井達夫で、各先生方と協力し投稿された論文の編集作業を行っております。

平成28年度の第一回編集委員会を、第59回日本手外科学会学術集会開催期間中の平成28年4月22日に広島文化交流会館で開催し、各議題について審議を行いました。

投稿論文の質を上げるために、論文登録システムの一部を改善しました。論文登録システムで、投稿論文は指導者の校閲、承認を得ていることを義務付けし、投稿者からの申告を確認後、登録できるようにシステムを改善しました。これにより、投稿論文は指導医のチェックを受けるように促される

ため、論文の質の向上につながることを期待しております。

また、日手会雑誌投稿論文を英文雑誌に引用文献とする時の便宜を図るため、掲載論文の論文タイトル、著者名を英文併記とすることにしました。論文投稿時には、適切な英文併記をよろしくお願い致します。投稿論文の統計処理の記載に問題が見られるため、編集員の査読での指導方針について取り決めを行いました。また、オンラインジャーナルの画面を一部変更し、会員の皆様に日手会雑誌を読み易くする予定です。

今年度の投稿受付論文数は学術集会発表論文214編、自由投稿論文36編で、総計 250 編でした。昨年より学術集会発表論文は20編程減少しています。この減少は、投稿論文に指導者の校閲、承認を得ることを求めたためと思われる。日手会雑誌の33巻オンラインジャーナル公開は、2号：平成28年11月28日、3号：平成28年12月19日、4号：平成29年1月30日、5号：平成29年2月27日、と順調に発行され、6号は平成29年4月頃を予定しております。代議員の先生方に年間 2～3 編の査読をお願いしておりますが、オンラインジャーナルが予定日に公開されるように引き続き、期限を守って査読業務を行っていただきますように宜しくお願い申し上げます。

より質の高い日本手外科学会雑誌の発行に向けて編集委員一同、一層の努力をしておりますので、引き続き学会員の皆様には今後ともご支援、ご協力を宜しくお願い申し上げます。

機能評価委員会

担当理事 稲垣克記

日本手外科学会機能評価委員会の新委員長は長田龍介先生、担当理事は稲垣克記です。前委員長の中村俊康先生には大変ご足労をおかけし任期となりましたが、アドバイザーとして今後も継続してご指導いただくことになりました。

従来事業といたしましては、

- ①日本手外科学会機能評価表第5版の作成とPDF化、HP掲載
 - ②MHQ (Michigan Hand Questionnaire) 日本語版の検証
 - ③ハンドセラピスト学会との共同作業で適切なperformance testの検討
 - ④可動域測定法、握力測定法の標準化
 - ⑤再接着評価法の妥当性の検討：玉井評価、Hand20、SF-36、DASH 整合性の検討
- を中心に本委員会でディスカッションし進めて参りました。

特に、SW monofilament testによる知覚検査が保険収載されたことからテスト用紙(手の区画)の標準化をHPに掲載し、会員であれば簡単にダウンロードできるように提案され、現在掲載されるようになりました。

また、握力計はJamar握力計が推奨との事になりましたが、市販品は10万円程度と高価であり、再現性も機器により異なるとのことで、全ての施設で標準化する事はなかなかむずかしいと思われま

II. 新規事業(検討事項)は、

1. 日手会標準の指角度計の作成 試作品の検証

2. 手関節評価の策定と検証

等です。

その他、変形性手指関節症に関し、画像分類をはじめガイドラインやエビデンスがないことから、多施設共同研究で機能評価を行い、第60回日本手外科学会学術集会会長の平田教授の発案で世界に向けてそのアウトカムを発信しようと準備がすすんでいるところです。

以上、機能評価委員会のご報告をさせていただきました。

学会員の皆様には今後とも引き続き、ご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

国際委員会

委員長 和田卓郎

国際委員会は柿木良介担当理事、柴田実アドバイザーのもと、面川庄平、金谷文則、佐藤和毅、田中利和、服部泰典、三浦俊樹、和田卓郎の6名の委員から構成されます。今年度の活動の概要を報告します。

HKSSH、ASSH Travelling Fellowを選出

平成29年度のJSSH-HKSSH Travelling Fellowとして上村卓也先生(大阪市立大学整形外科)を、JSSH-ASSH Travelling Fellowとして岡久仁洋先生(大阪大学整形外科)、高木岳彦先生(東海大学整形外科)を選出しました。候補者は皆すばらしい業績をお持ちで、選考に苦慮しました。英語でのプレゼンテーションと質疑応答を取り入れた選考も2年目になりました。来年度以降も継続して行きたい選考方法です。

Bunnell Fellow、HKSSH Fellow来日

平成29年4月27、28日に平田仁会長のもと名古屋市で開催される第60回日本手外科学会学術集会には、Bunnell FellowとしてDr Ryan Calfee (Washington University)が、HKSSH FellowとしてDr Emily Yipが来日されます。平田会長のご高配により、学術集会ではTravelling Fellow Sessionが設けられ、日本のフェローと共に発表をしていただきます。両国のfellowは日本各地の施設を見学されますので、ホストの先生にはどうぞよろしくお願いいたします。新しい試みとして、Bunnell Fellowの訪問先を公募しました。できるだけ多くの施設がfellowと交流をもてるようにしたいと思います。来年度以降も積極的な応募を期待します。

第71回米国手外科学会でのInternational Guest Society

2016年9月29日～10月1日にテキサス州オースチンで開催された第71回ASSH学術集会において、JSSHはInternational Guest Societyとして大きな貢献をしたと、Neil Johns学会長からお褒めの言葉

をいただきました。詳しくは日手会ニュース第46号をご参照ください。矢島理事長がいただいたト
ロフィー、学会でのスナップショットは第60回日手会学術集会で展示しますので、ぜひご覧ください。

以上、国際委員会の活動を報告させていただきました。

広報渉外委員会

委員長 白井久也

平成28年度の広報渉外委員会は、平瀬雄一担当理事、千馬誠悦アドバイザー、日高典昭 岡崎真人 磯貝典孝 佐竹寛史 辻英樹の各委員と私の計8名で委員会の活動をしてきました。第1回委員会を4月に開いたときは、理事、アドバイザー、委員長、委員3人の大幅交代となりました。第2回委員会は9月にWEB会議で、第3回委員会は12月にWEB会議で、第4回委員会は平成29年2月の日本肘関節学会の期間中に東京で行いました。

日手会ニュース第45号を発刊しました。理事長からのニュースレターの項を新設し、初回は矢島理事長に執筆をお願いしました。日手会が日本専門医制評価認定機構から認めてもらえるかどうかのupdateな記事をいただきました。

平成28年8月には号外を出し、新理事長、新理事の先生方に抱負などを寄稿いただきました。また、12月には第46号を発刊しました。生田義和先生の「手は語るハンドギャラリー」のシリーズは終了となったため、上羽康夫先生に「No man's landからzone IIへの推移は語る」を執筆いただきました。今後も手外科温故知新のコーナーとして連続して寄稿いただけるように委員会から要望していく努力を図ります。日手会ニュースでは読み物的な原稿が不足していますので、特に名誉会員、特別会員の先生方からの自由な寄稿をお待ちしています。現在、バトンリレーという新シリーズ立ち上げに向けて検討を重ねています。

手外科シリーズの手外科パンフレットは有用な紙媒体でしたが、エーザイでの保管が平成28年2月で終了となりました。今後、会員の皆様はホームページからPDFファイルをダウンロードして各自プリントする必要があります。ホームページの「一般の皆様」から入り、「代表的な手外科疾患」を開くと見ることができます。著作権のことも検討し、会員以外がパンフレットを使用する場合は事務局に連絡が必要と補足を入れました。今回、新たにNo.29癒痕・癒痕拘縮が加わりました。現在、No.30「握り母指」、No.31「斜指症」を作成中であり、先天異常委員会からいただいた原稿の校正を重ねています。

今後も皆様のご理解とご指導の程、よろしく申し上げます。

社会保険等委員会

委員長 亀山 真

社会保険等委員会は池上担当理事以下、高瀬アドバイザー、岩瀬、島田、代田、鳥谷部、光安、森田の7名の委員、および委員長亀山の計9名で活動を行っております。

◆外保連活動

各種委員会に委員を配し活動を行っております。本学会として新たに外保連試案に登録すべき技術を検討し、酵素注射療法(ザイヤフレックス)、カスタムメイドガイドを用いた骨切り術および変形治癒骨折矯正術(上腕骨、前腕骨)の試案を作成し、委員会を通じて登録しました。外保連手術試案は来年度中に第9版ができる予定ですが、これに合わせて各手術の技術度、手術時間、協力人数の実態調査が行われました。

◆平成28年度診療報酬改定結果

今回要望をしていた技術のうち、靭帯性腱鞘内注射(25点→27点)、精密知覚機能検査(280点)、超音波骨折治療の舟状骨偽関節手術への適応(4620点)が認められました。その他、外保連試案2016を基に手外科手術の多くで増点を得ることができました。

◆平成30年度診療報酬改訂に向けての活動

次年度改定の準備として、要望項目アンケート(新規、改正)を外保連へ提出しました。内容は、①知覚再教育、②酵素注射療法、③カスタムメイドガイドを用いた骨切り術、④カスタムメイドガイドを用いた変形治癒骨折矯正術、⑤手術の通則14の留意事項(4)指に係る同一手術野の範囲アの(ハ)の記述の中の「指(手、足)」の語句を削除、⑥靭帯性腱鞘内注射、⑦上肢局所静脈内麻酔への0.5%キシロカインアンプルの適応、としました。平成28年度末には医療技術評価提案書の作成、外保連への提出を予定しています。平成27年9月よりデュピュイトラン拘縮に対するコラーゲナーゼ注入療法は、平成28年度改訂の結果、酵素注射療法(490点)により算定となっております。しかし、薬液を確実に病巣内に注入する手技の難易度、治療期間が2日にまたがること、治療後の副作用に対する追加処置の必要性、等を考えると現在の点数が使用実態を反映しているとは言い難く、次年度の改訂ではこれの増点申請を予定しております。

◆学術集会ランチオンセミナー

第59回学術集会で亀山(委員長)による講演が行われ、多数の会員の方々の出席を賜りました。内容は、平成28年度診療報酬改定の結果、全国整形外科保険審査委員会議(全審会)の討議内容、診療報酬算定上のQ&A、等について講演をさせていただきました、今後も会員の皆様に社会保険に関する有益な情報を提供できればと考えております。

先天異常委員会

委員長 橋本 一郎

先天異常委員会の主な活動内容は、第55回「手の先天異常懇話会」の開催、母指多指症の単純X線分類によるWassel分類の再検討、手の先天異常症例相談窓口の運営、「代表的な手外科疾患」パンフレットの「握り母指症・斜指症」に関する新しいパンフレットの作成、などがあります。本委員会活動が先天異常手の診療に役立つ情報を発信できることを目標にしています。

手の先天異常懇話会

第60回日本手外科学会学術集会の期間中に、平田仁会長のご配慮により手の先天異常懇話会を開催する予定です。今回のテーマは「絞扼輪症候群」に対する手術を中心とした治療法です。国立成育医療研究センター病院 整形外科 関敦仁先生には「基礎編」を、国立成育医療研究センター病院 臓器・運動器病態外科部 高山真一郎先生には「応用編」を講義していただきます。本懇話会は日本手外科学会と日本整形外科学会の専門医教育研修単位、日本形成外科学会の専門医資格更新単位を申請しております。また、本委員会では「手の先天異常懇話会のあり方」について、出席者へのアンケートを行い、講演内容の難易度や症例検討の必要性、適切な開催時間などを調査して、懇話会が会員にとって魅力的となるために検討を続けています。

手の先天異常症例相談窓口の運営

昨年度に日手会ホームページ上で開設された「先天異常症例相談窓口」では、相談症例はまだ少ないですが、症例相談の運営を開始しています。

「代表的な手外科疾患」のパンフレットの新規作成

日手会ホームページに掲載されている「代表的な手外科疾患」パンフレットにすでに「母指多指症」と「強剛母指」の修正版が掲載されています。また、「握り母指症」と「斜指症」について新しく「先天性の手指変形」パンフレットとして原案を作成しました。現在は、パンフレット完成に向けて広報渉外委員会と検討を行っています。

これからもみなさまのご支援とご指導をよろしくお願いいたします。

倫理利益相反委員会

委員長 根本 充

当委員会は、酒井昭典担当理事、渡邊健太郎アドバイザー、塚田敬義アドバイザー、重富充則委員、普天間朝上委員、湯川昌広委員、深谷和子外部委員、山我美佳外部委員、委員長の私の9人体制で活動しております。本年度は新規入会希望者の審査、利益相反自己申告書の審査以外に『日本医学会COIマネジメントに関するガイドライン』改定および新たに制定される『診療ガイドライン策定参加資格基準ガイダンス』に関する審議を行いました。

1 入会審査

学術集会時期の4月は毎年30名前後の方が新規入会を申請されますが、それ以外は毎月10名前後の入会希望者の審査を行っております。平成28年1月～12月までの入会希望者は正会員154名、準会員12名で、審査の結果、全員承認として理事長に上申しました。

2 利益相反自己申告書の審査

アドバイザー、外部委員の先生方にも参加していただき、利益相反自己申告書の審査を毎年行っております。審査の結果、疑義が生じた場合には疑義の確認を行い、審査結果を理事長に上申しました。

3 倫理利益相反に関する審議

平成28年11月に日本医学会から『医学系研究のCOIマネジメントに関するガイドライン』(改定案)および『診療ガイドライン策定参加資格基準ガイダンス』(案)が加盟学会に提示されました。慎重に審議を重ねた結果、日本手外科学会においてもガイドライン(改定案)およびガイダンス(案)に準じたガイドライン改定とガイダンスの制定を理事長に上申しました。

最後に、日手会ニュースが発行される平成29年4月頃には日本医学会から改定された『日本医学会COI管理ガイドライン』(改称予定)と新設される『診療ガイドライン策定参加資格基準ガイダンス』が公表される予定になっています。日本手外科学会においても、基本的にはこれらのガイドライン、ガイダンスに準拠することになりますので、会員の皆様にはガイドライン、ガイダンスを一読していただき、活発な学会活動をお願い致します。

学術研究プロジェクト委員会

委員長 小野浩史

構成

日本手外科学会学術研究プロジェクト委員会の構成メンバーは、酒井昭典担当理事、仲沢弘明アドバイザー、小野浩史委員長、釜野雅行委員、鈴木茂彦委員、高木誠司委員、村松慶一委員です。

活動内容

1. 平成28年度学術研究プロジェクトの選考

平成28年11月6日にTKP東京駅前カンファレンスセンター9B号室にて委員会メンバー4名参加で、平成28年度学術研究プロジェクト選考委員会を開催し平成28年度学術研究プロジェクトの選考を行いました。今年度は、プロジェクト委員会主導の研究テーマである「切断指」に対する応募は一件もなく、一般自由研究テーマに4件の応募がありました。この4件のうち委員の評価が高かった、キッコーマン総合病院整形外科田中利和先生の「尺側手根伸筋腱鞘炎の発生メカニズムに対するMRIによる研究—正常ボランティアに対する尺骨ECU溝の形態と前腕回内外動作による尺側手根伸筋腱の滑動性との関係と有症状者との比較—」と、東京医科大学茨城医療センター吉井雄一先生の「橈骨遠位端骨折内固定術における3D術前計画と2D-3DFusion画像による手術支援システムの構築」の2件が選出されました。両プロジェクトとも理事会で承認されました。

2. 学術研究プロジェクト進捗状況報告書のチェック

日本手外科学会学術研究プロジェクトに選ばれますと、毎年研究の進捗状況を報告し、終了から1年以内に結果を日本手外科学会学術集会で発表し、かつ、日手会雑誌もしくは英文雑誌(impact factorの付与された雑誌を強く奨める)で公表することが義務づけられています。なお、日手会雑誌には、自由投稿論文として発表していただくようお願いしております。研究者からの報告書を委員で分担し、研究の進捗状況、助成金の使途、学会報告、論文報告をチェックしております。平成28年

度は、平成24年度選考のプロジェクトの終了時審査と平成25年度選考の2件および平成26年度選考の1件、平成27年度選考の2件の進捗状況チェックを行いました。また、すでに終了したプロジェクトで論文が確認できていない研究者に投稿を促すことになりました。学会ホームページ上にも平成23年度以降の選出結果を公表しております。

3. 日本手外科学会学術研究プロジェクト委員会主導の研究テーマ

平成25年度より個人からご提案いただくプロジェクトのみならず、学術研究プロジェクト委員会が研究テーマを提示して、そのテーマに沿った研究プロジェクトの募集をおこなっています。平成28年度プロジェクト委員会主導の研究テーマは「切断指」でしたが1件も応募がなかったため、平成29年度も引き続き「切断指」を募集することになりました。また平成29年度の新たな研究テーマとして「腱鞘炎」を指定いたしました。腱鞘炎に関係するあらゆる研究を対象と致しますので、会員の皆様奮ってご応募ください。よろしく願いいたします。

今後とも、学術研究費の有効利用と手外科研究者のモチベーションの向上につながるプロジェクトの実施を目指し努力いたします。皆様のご指導、ご鞭撻の程お願い申し上げます。

専門医制度委員会

委員長 田中克己

◇委員会構成

本委員会は専門医制度を統括する目的で、他の各種委員会との連携のもとに活動を行っています。

平成28年度の委員会構成メンバーは稲垣克記担当理事、落合直之アドバイザー、朝戸裕貴委員、加藤博之委員、亀井 譲委員、酒井昭典委員、砂川 融委員、三上容司委員、矢島弘嗣委員と委員長田中克己です。本委員会は専門医制度の総合的な運営を行うものとして位置づけられています。そのため、カリキュラム委員会、専門医資格認定委員会、専門医試験委員会ならびに施設認定委員会の各委員会との連携を取りながら、新専門医制度に向けての制度設計を中心に活動しております。

◇活動内容と今後の方針

当初、2017年4月から基本領域学会の新専門医制度が開始予定でしたが、いくつかの理由で施行開始が1年間延期となりました。サブスペシャリティ領域である日本手外科学会では、これまで通り基盤学会である日本整形外科学会ならびに日本形成外科学会の専門研修プログラムとの整合性を図りながら、新専門医制度のプログラム作成を進めております。

2016年12月に専門医機構からは専門医制度新整備指針が発表されました。その中で、「新たな専門医の仕組みは、機構と各基本領域学会が連携して構築すること」と掲げられました。また、同整備指針の中で、「サブスペシャリティ学会専門医では、研修プログラム制、研修カリキュラム制のいずれも可能とする。また、実際の運用にあたっては、地域医療への影響を考慮し、硬直的になることを避け、研修の質の低下にならない範囲で柔軟に対応するものとする。」と記載されており、さらに、「なお、

サブスペシャリティ学会専門医では、研修施設群の形成は必須ではないものとする。」との表現がみられます。

このことは日本手外科学会の制度設計に対しても少なからず影響を及ぼしております。日本手外科学会としては、この新整備指針に則り、現在の質の高い専門医性を維持しながら新制度への移行を目指してまいります。また、昨年、会員の皆様のご協力をいただき、認定研修施設における2015年の1年間の手術症例数調査を行いました。手術症例に関する貴重な調査結果が得られ、今後の制度設計に活かしてまいります。調査結果については、あらためてご報告を行う予定です。この場をお借りして、調査へのご協力に重ねて御礼申し上げます。

引き続き基本領域学会との連携を図りながら、手外科学会の専門医制度がさらに良いものとなり、医療全体に貢献できるように考えてまいります。引き続き会員諸氏のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

専門医資格認定委員会

委員長 中尾悦宏

【委員会構成】

専門医資格認定委員会は、今年度は資格更新の審査数が例年の数倍になることから、年度初めに委員を5名増員いたしました。亀井譲担当理事のもと、石河利之委員、大泉尚美委員、大谷和裕委員、加地良雄委員、國吉一樹委員、児玉成人委員、高木岳彦委員、鳥山和宏委員、野口政隆委員、松村一委員と委員長の中尾悦宏、11名で活動しております。年間を通じて寄せられる専門医制度や受験資格、更新申請の要件等、様々な問い合わせに対応し、10月以降、専門医試験受験資格、専門医更新資格について審議し、また相談医の推薦をおこなっております。

【活動内容】

4月22日に第1回委員会を開催し、今年度のスケジュールの確認を行いました。早い時期より専門医試験受験や更新の要件、手続きについて多くの問い合わせがあり順次回答し、細則や現在のFAQではわかりにくいものについては委員間でメール審議を行い対応いたしました。

今年度は、先に記したように更新対象者が多かったため、例年より早い7月1日に「第9回手外科専門医試験受験資格認定申請」および「専門医更新申請」についてホームページに公示いたしました。受付期間中に専門医試験受験は75名、更新は348名の申請があり、事務局で書類をPDF資料とし、11月9日に各委員に郵送し審査を開始しました。結果を事務局でまとめ委員間で共有し、12月6日のweb会議で試験受験資格について、12月14日に更新資格について審議を行いました。受験資格審議にて、書類不備や不足、不適切な病歴要約症例や考察不足等が指摘された申請者には、1月初旬までに書類の修正、再作成、不足書類の提出、適切な病歴要約症例への差し替え等を求めました。更新資格審議では、診療「症例」の期間間違いが数名にみられ再提出を依頼いたしました。これらの手続きを経て、1月8日、東京で第二回委員会を行い慎重に審議し、受験申請では75名中73名において、更新申請では348名全員において資格を満たしていると判定いたしました。また相談医の審査も行

い、本年度は6名を選出し理事会に推薦しております。またFAQの数項目の追加、書き換えについて意見を交わし、1月下旬から2月の委員会メール審議を経て3月の理事会に承認を求める予定です。

今年度の本委員会は、更新申請対象者がたいへん多かったことに加え、審査に時間を要する新規受験申請も例年の倍近くあり業務量は格段に増加しました。委員を増員し全員の篤実など協力にて乗り切ることが出来ました。委員の先生方、そしてご協力を賜りました多くの学会員の先生方に心より感謝いたします。引き続きお力添えをよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、事務局の皆さまにはたいへんお世話になっております。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

施設認定委員会

委員長 藤尾圭司

平成28年度は、石川浩三委員長が任期満了で退任され、藤尾圭司が後任として引き継がせて頂きました。メンバーは担当理事が坪川直人、委員は尼子雅俊、川勝基久、岸陽子、坂井健介、副島修(五十音順)の計5人です。主な活動は新規と継続の施設認定です。現在は多くの専門医修得希望者が研修しやすいように、できるだけ施設認定を認める方向で努力しています。新規申し込みは随時行っていますが、更新の申し込み期間は例年10月から11月に行っていますのでホームページを参考にしてください。認定作業時期は12月に委員にメールを送って各委員に二重にチェックを行って頂き、委員長、理事で最終確認を行っています。最終的に1月の理事会で承認を得ています。

今年度申請期間における申請数は、更新審査が38件(基幹研修施設33件認定、関連研修施設5件認定)、新規審査が11件(基幹研修施設4件認定、関連研修施設6件認定、認定されなかった施設が1件)でした。

委員会で議論の一つになったのは専門医の在籍期間に関するものです。専門医取得して在籍1年経過すれば、その施設で申請は可能です。満たない場合でも以前に専門医がいたのであれば追記報告してください。ただしその施設が認定要件を満たすことが条件です。異動特例で、専門医が赴任した施設においても同様です。ただし前在籍施設が認定施設であったことが条件になります。

今後の課題は、今まで専門医を増やすため基準を少し緩めていましたが、内容証明を提出していただく以上、申請時における明確な基準を銘記すべきとの意見が出されました。具体的な1例として、現状における手外科認定施設の施設基準として手術用顕微鏡は必須のものとの意見もあり、他の項目も分かりやすいはっきりとした基準あるいは推奨すべき内容を提示しておくべきとの意見も頂きました。専門医を増やすという観点とqualityの高い専門医制度という観点から考えていかなければならない課題と思われれます。今後新専門医制度の新基準が出た時点でその改訂作業を行っていき、現状は現行制度のままでいくという方針で委員間の意見が一致しました。いずれは新専門医制度に対する施設認定は、厳密に規定を作成しなおす必要があると思われれます。

専門医試験委員会

委員長 佐野和史

1) 委員会メンバー

専門医試験委員会は加藤博之担当理事、新井健アドバイザー、池田和夫委員、池田全良委員、清川兼輔委員、小林由香委員、酒井昭典委員、田中利和委員、長尾聡哉委員、長谷川健二郎委員、福本恵三委員、古川洋志委員と今年度より鈴木克侍先生に代わり委員長を拝命致しました佐野和史の13名で活動しております。

2) 第8回専門医試験結果

平成27年度第8回専門医試験は平成28年3月20日(春分の日)に開催しました。受験者数は49名(整形外科47名、形成外科2名)で、平均点64.6点、合格率73%の結果となりました。適正な問題を作成するために委員全員のできる限りの準備を行いました。それでも識別指数が逆転する問題が2題、正答率が10%未満の問題が1題ありました。良問作成の難しさを痛感させられます。

3) 第9回専門医試験にむけて

① 公開問題の閲覧について

今年度よりホームページ上で閲覧可能な公開問題が2008年度(第1回)、2009年度(第2回)、2010年度(第3回)の3年分に増え、受験者にとって事前に筆答試験の概要を捉え易くなりました。

② 形成・整形分野別選択問題の導入

第9回専門医試験より、筆答問題が新たに一部分野別選択問題(共通問題40題と形成・整形外科学分野別選択問題が各4題)となります。分野別選択問題4題は受験者の基盤学会に関わらず、形成・整形外科分野いずれも選択可能です。選択問題は筆答試験中に設問内容を確認した上で選択可能ですが、4題一括でいずれかの分野選択となります。この変更内容については、ホームページ内の「専門医試験情報[4]筆答試験について」の説明文一部変更、および同内容の郵送による第9回専門医試験受験者への周知を行いました。今後、形成外科からの受験者の増加に繋がることを期待しております。

③ 第9回専門医試験開催

平成28年度の第9回専門医試験は例年同様に平成29年3月20日(春分の日)にステーションコンファレンス東京で開催となります。今回の受験者は73名となる予定です。受験者が多いことは専門医試験を準備する立場からしても大変嬉しい限りですが、委員13名だけでは対応が難しいため、東京近郊の代議員の先生方数名に試問員としてお手伝いをお願いする予定です。お声がけした先生方には是非お力添えを宜しくお願い致します。

カリキュラム委員会

委員長 長 田 伝 重

1. 構成員

カリキュラム委員会は平成28年4月に構成員の変更があり、岩崎倫政担当理事、松下和彦アドバイザー、松村 一委員、沢辺一馬委員、柿木良介委員が退任され、田中克己新担当理事、岩崎倫政新アドバイザー、石河利広新委員、加地良雄新委員、松田 健新委員が加わり、吉本信也委員、森友寿夫委員、長田伝重委員長の計8名で活動しています。

2. 活動内容

委員会活動は主にweb会議を中心とし、必要に応じて委員会を開催しています。

(1) 教育研修講演申請の審査

本委員会の主な活動で、毎月審査を行っています。平成28年2月から平成29年1月までの申請件数は293件で、認定285件、非認定8件でした。非認定の理由は、講演の内容が手外科と直接関係の無いことでした。

3. 教育研修講演認定内容の変更と講演タイトルについてのお願い

(1) 教育研修講演認定内容の変更について

H28年4月の委員会決議により、新たに医療倫理、医療安全、および感染を認定することとしました。感染については人工関節感染全般は認めるが、手外科以外の個々の人工関節感染(例、人工股関節、人工膝関節、人工肩関節等)のみは認めないこととし、また、固有の薬品名のついた講演は認めない(例、アミカシン[®]による感染症について)ことになりました。

(2) 講演タイトルについてのお願い

単位申請審査時に判定しやすくする目的で、日整会講演単位申請と同様に、講演タイトルに手外科に関する内容とわかる言葉を入れるようお願いいたします。また、タイトルからは手外科との関連が明確でない場合と判断した場合は講演抄録の提出をお願いすることもありますので、宜しく願いいたします。

情報システム委員会

委員長 西 浦 康 正

担当理事:池上博泰、委員長:西浦康正、委員:稲垣克記、落合直之、柿木良介、垣淵正男、加藤博之、亀井譲、酒井昭憲、砂川融、田中克己、坪川直人、平瀬雄一、三上容司、矢島弘嗣、陪席者:平田仁出席で、2017年1月8日に委員会を行いました。

日手会では、日整会会員が多いため、日整会システムと連携することが理事会で決定されました。私が日整会情報管理システム委員会の委員長でもあるため、日整会の情報管理システムの現況を報告させていただきました。主な内容は、専門医管理Webシステムと新事務局システムがほぼ完成し、

現在試行中で4月から本格稼働予定であること、このシステムは他学会との連携を想定しており、医籍登録番号によって他学会と連携することが可能であることなどです。

京葉コンピューターサービス (KCS) の並木氏から、日手会情報システムの今後についての提案がありました。主な内容は、日整会との連携のために、会員管理システムの再構築が必要であること、e医学会への加入についてなどです。会員管理システムの再構築には約半年かかるとの説明でした。これに関しては、手外科の新専門医システムの詳細がまだ決定しないため、それがはっきりしてから再度検討することとなりました。e医学会への加入はカスタマイズ費用、年間利用料などの料金がかかりますが、日形会会員がe医学会カードを使用することによって、日整会システムの利用が可能となります。このほか、eラーニングおよび動画配信、専門医研修履歴管理、研修会の公示なども可能となります。e医学会への加入は、以前、決定していましたが諸事情によって見送られていた事項です。問題が解決したため、準備が整いし加入することを確認しました。これらによって、懸案であった単位管理のデジタル化の問題が解決します。

第60回学術集会の平田会長から、参加登録および日手会教育研修単位登録のために日整会カードを使用したいとの申し出があり、これについて検討しました。日整会と連携するためには、両学会において会員が医籍登録番号の登録を行う必要があります。しかし、開催までの猶予がなく準備が間に合わないため、KCSから目視による会員のマッチングを行うとの提案がなされましたが、相応の料金がかかることが問題となりました。このマッチングは、システムさえできれば料金がかかりません。このため、今回は、この料金を学術集会の運営費から拠出していただくことで、平田先生から矢島理事長を通して日手会から日整会に申し入れをしていただき、試行ケースとして連携することとなりました。また、今回は、日形会会員に対しては従来通り、紙で対応していただくことになりました。

用語委員会

委員長 後藤 渉

本委員会は昭和56年(1981年)に設立され、平成2年(1990年)5月に手の外科用語集第1版が発刊されました。その後は平成6年(1994年)5月に手の外科用語集(改訂版)(索引号 溪水社)、平成9年(1997年)5月に手の外科用語集(通算第3版、株式会社南江堂)、平成14年(2002年)4月に手の外科用語集改訂第2版(通算第4版、株式会社南江堂)、平成19年(2007年)5月に手の外科用語集改訂第3版(通算第5版、有限会社ナップ)、平成24年(2012年)4月に手外科用語集改訂第4版(通算第6版、有限会社ナップ)が発刊されました。さらに、平成26年(2014年)11月に手外科用語集改訂第4版(PDF版)が日手会HP(会員専用)に収録されました。

平成24年度から始まった改訂作業が平成27年度で終了し、平成28年4月に渡邊健太郎理事、田中英城委員長の元(浦部忠久、根本充、牧信哉、後藤の6名)、手外科用語集改訂第5版(電子版、通算第7版)が完成し、手外科HP会員専用ページにアップされました。あわせて、手外科用語集第4版(PDF版)が日手会HP(一般・医療関係者)に収録されました。新用語の追加作業のみならず、デジタル化にあたってすべての用語の表記の修正、追記、整合性のチェック作業には膨大な労力と時間を要しました。

平成15年度以来毎年、用語集のデジタル化についての議論が行われていましたが、ようやく実現にこぎ着けることができました。デジタル化への道のりは、平成14年(2002年)発刊の手の外科用語集改訂第2版(通算第4版)の改訂作業後、当時の浜田良機委員長および山梨大学整形外科のご尽力により全用語をエクセルデータに移行したことに始まります。その後CD化や体裁、配布方法、コスト、検索機能付加、配布対象等、様々な議論が行われており、歴代用語委員の努力が報われたものと思います。

平成28年度に用語委員会は常設委員会となり、任期満了を迎えた田中前委員長、浦部委員の代わりに、新たに加藤博之理事、越智健介、加藤直樹、湯川昌広各委員が加わり、渡邊健太郎前理事はアドバイザーとして加わって頂くことになり、残留の根本充、牧信哉各委員、そして委員長となった後藤の計7名で活動しています。

手外科用語集が、南江堂が著作権を持っていた冊子版から、電子版(著作権は日手会)となったことで、費用的にもKCSによる日手会HPの管理費の範囲内で行われるため新たな費用はかからずに容易に改訂できることになり、また紙面の制約もなくなることから用語集のあり方が劇的に変わる可能性があります。

改訂第3版へ向けた改訂作業時には、第2版の不備等について当時の全評議員へアンケートを行い、さらに全評議員に用語を振り分けてダブルチェックを行っていますし、第4版へ向けた改訂作業時にも改訂第3版のエクセルデータを全評議員に送付し、分担して検討をしていただいておりますが、第5版でもまだ用語の不備はあろうかと思えます。今年度の作業はまず、「用語集に関するQ & A」として、会員からの手外科用語集に対する修正や要望を受け付ける仕組みを作り、平成28年11月にHP会員専用ページにアップしました。まだ会員へのアナウンスの不足からか、今のところ思ったほどの反響はありませんが、ある程度の要望がたまったところで委員会において検討し、用語集に反映させていく予定です。多数のご指摘をお待ちしております。

次に、次回の大改訂のために、第5版の改訂作業手順に倣いGreen's Operative Hand Surgery(第7版:2016年)に追加された見出し語を抽出して、そこから追加すべき用語を取捨選択する作業を開始しました。

三つ目は、日本整形外科学会から整形外科学用語集第8版に関するアンケートを依頼され、第8版に対する意見と、次期第9版に対する要望を問われたため、これを機に手外科用語集と整形外科学用語集、その次には日本形成外科学会用語集との整合性をとる作業を、両学会用語委員会と連携をとりつつ行う予定としました。さらには日本整形外科学会用語集に採用してほしい手外科関連用語を提案する作業も同時に行います。

四つ目は、日本医学会医学用語辞典WEB版との統合についてです。平成28年1月の理事会において、統合される方針が確認されています。しかし日本整形外科学会では統合に協力的ではあるものの、具体的な方法・日時は未定です。また日本形成外科学会用語集はそのプラットフォームは日本医学会医学用語辞典のものを使っているものの用語集自体は統合されていません。そのような現状では手外科学会としても統合は時期尚早であろうとの結論となり、日本整形外科学会の動向をみなが

ら再検討することとなりました。ただし、平成28年12月5日に行われた日本医学会分科会用語委員会において、日本医学会医学用語辞典Web版の編集方針と凡例が初めて明らかにされたので、近い将来に行われる統合時の作業が少しでも楽になるようにと、手外科用語集の編集方針との摺り合わせを行う議論も行いました。

以上のようにまだまだ多くの課題をかかえており、それらすべての作業が終了するには4-5年かかるのではないかと考えています。しかし、今までも多くの先生が指摘されているように、用語集とは常に未完なものであり、修正、改訂を永遠に繰り返さなくてはならない宿命を抱えています。ようやく頂上にたどり着いたと思ってはまだその先に頂が聳えている、そんな感じかもしれません。それでもデジタル化された今、その頂は高くはないと思います。皆様からのご要望をお待ちしております。

Web 登録委員会

委員長 田 尻 康 人

Web登録委員会は、専門医資格申請・更新、症例登録等をWeb上で行うことを目的に編成された委員会、基盤学会である日整会、日形会の専門医制度や情報システム制度と密接に関連した活動が必要となります。

平成28年度の委員会活動

当初は基盤学会の新専門医制度が整備され平成29年度から開始される予定であったため、平成28年4月22日、凡そ3年ぶりに本委員会を開催し、親学会の情報システムの進捗状況の確認、ならびに今後の手外科Web登録システム作成の方向性について検討を行いました。

その後の予定として、日整会のシステム準備状況に併せて平成28年秋頃に委員会を開催する予定としていましたが、平成28年度4月からの新専門医制度開始が見直しとなったため、システムの準備状況が停滞し現在まで本委員会も開催は見合わせとなっております。

今後の活動方針

今後は基盤学会の情報システム整備の進捗状況に沿って当委員会も活動を再開する予定です。

定款等検討委員会

担当理事 柿 木 良 介

定款等検討委員会は、亀井譲先生、木森研治先生、平田仁先生、藤岡宏幸先生と私、柿木とで担当させて頂いております。現在矢島理事長より、日本手外科学会代議員の定年制の導入と円滑かつ機能的な日本手外科学会代議員選挙の実施の2点について、主に日本手外科学会代議員細則の見直しを行うようご指示をいただき、検討を重ねております。

1. 日本手外科学会代議員の定年制の導入

現在日本手外科学会代議員には、定年はありません。しかし学会としては、若い会員の方に代議員になっていただく機会を増やし、今後学会が若い活力ある会員により運営されることの必要性を鑑みて、日本手外科学会代議員の定年制の導入について、日本手外科学会代議員細則の改定を検討いたしております。

2. 円滑かつ機能的な日本手外科学会代議員選挙の実施

日本手外科学会では、今まで各選挙地区の先生方のご尽力により、代議員選挙になったことはありません。代議員は原則、選挙により公正に選出されるものですが、また一方、その選出は、学会運営に、非常に重要な意味を持てきます。代議員は、どうしても都市部に集中しがちで、都道府県間で人数に大きな格差があります。選挙となると、この格差がさらに顕著になる可能性があります。時には、学会運営上非常に重要と考えられている人物が落選するという事態が発生しないとも限りません。現在、定款等検討委員会では、これらの弊害を極力なくし、かつ公平性を損なうことのない機能的な代議員選挙制度の確立を目指して定款、細則の見直しを行っております。

また定款等検討委員会では、広く会員の皆様からご意見を頂きたいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

橈骨遠位端骨折診療ガイドライン策定委員会

委員長 **安部 幸雄**

2014年4月の委員会発足以来、足かけ3年を費やしガイドラインの改訂を行ってきました。昨年のご報告以降、2015年に代議員の皆様にご協力頂きました構造化抄録に、前回のガイドライン 2012に採用された文献に対しても委員会にて新たに構造化抄録を作成し、総数1700の文献を検討の対象としました。これらの文献に対し、症例数20例以上(比較対象は20例×20例以上)、経過観察期間6か月以上、5項目のアウトカム(DA SH, Mayo, 握力、可動域、X線評価)を記載した論文を選定し、MINDS 2014の手法に則って、アウトカムの観点から、59のクリニカルクエスチョン(CQ)ごとに各論文を横断的に吟味しエビデンス総体を検討し、さらに非一貫性、不精確、出版バイアス等を評価してエビデンスレベルを決定しました。こののち各々のCQに対する推奨文を作成し、その推奨度とエビデンス強度を決定しました。

東京本郷の日整会事務局において幾度の委員会を開催し、加えてメールによる委員同士のやり取りを経て本文を作成し、2016年12月には2017年度版橈骨遠位端骨折診療ガイドラインの原案を日整会、日手会両ホームページに掲載し2017年1月13日までパブリックコメントを募集致しました。コメントをいただいた先生方にはこの書面をお借りしまして深謝申し上げます。1月15日現在、いただいたコメントを元に南江堂およびIMICの担当者とともに原文を作成しているところです。本版の特徴は昨今の手術療法の傾向から、エコー、関節鏡などの診断手法の意義、高齢者に対する手術適

応の変化、現在汎用されております掌側ロックングプレート固定の功罪、髓内釘の位置づけ、関節内軟部組織損傷や尺骨茎状突起骨折合併に対する処置、早期回復を目指したりハビリ、患者立脚評価を含めた治療成績の評価法など、前回とは趣を異にした部分がございます。十分皆様のご期待にお応えできるものと考えております。2017年5月に仙台で行われます第90回の日整会において販売できるように出版行程を進めているところです。ようやくここまで来られたのも皆様のご協力の賜物と存じます。出版まで今しばらくお待ちくださいませ。

担 当 理 事： 渡邊 健太郎、砂川 融

アドバイザー： 金谷 文則、(故 澤泉 卓哉)

委 員 長： 安部 幸雄

委 員 員： 泉山 公、今谷 潤也、金城 養典、川崎 恵吉、児玉 成人、清水 隆昌、長尾 聡哉、
仲西 康顕、藤原 浩芳、三浦 俊樹、森谷 浩治、門馬 秀介 敬称略

人工手関節ガイドライン策定委員会

担当理事、委員長 **池 上 博 泰**

人工手関節ガイドライン策定委員会は、平成28年に設置された新しい委員会です。委員会の構成メンバーは、稲垣克記、岩本卓士、酒井昭典、森谷浩治、矢島弘嗣の各先生方と担当理事兼委員長の池上博泰です。

北海道大学整形外科で平成16～18年の厚生労働科学研究費補助金事業にて新たな人工手関節の開発に着手し、数回の承認申請、治験等を経て平成28年の医薬品医療機器総合機構(PMDA)審査および厚生労働省医政局の面談の結果、この人工手関節を保健医療で使用する際にはガイドラインが必要ということになったため、この委員会が設置されました。

数回の委員会開催およびメール審議の結果、人工手関節全置換術ガイドライン案が策定され、日本手外科学会および日本整形外科学会の理事会で承認されました(表1)。このガイドラインはすでにPMDAにも提出されたので、この委員会は、今後は“人工手関節運用委員会”という委員会に発展的解消となることが、先日の平成28年度第3回定例理事会で認められました。

表 1

人工手関節全置換術ガイドライン

1. 適応基準

- ① 原則として保存的治療に抵抗する関節リウマチまたはその類縁疾患手関節
- ② 原則として50歳以上
- ③ Larsen分類grade IV～Vの患者、IIIにおいては人工手関節以外の手術で著しい可動域の低下や不安定性の出現等が予想される患者

2. 除外基準

- ① 基礎疾患に対するコントロールが著しく不良な患者
- ② 人工手関節再置換の患者
- ③ 神経病性関節症の診断を受けた患者
- ④ 手関節内部または周囲に感染症がある、若しくは潜在的感染の疑いがある患者
- ⑤ 精神・神経疾患を有し、医師の指導を守れないと考えられる患者
- ⑥ 医師の指導による後療法が実施できないと考えられる患者
- ⑦ 骨量が極めて少なく強固な固定が見込めない患者や、筋肉、腱の再建が困難で機能の回復が見込めない患者
- ⑧ 骨セメントの使用に伴う血圧低下、ショック、肺塞栓等の重篤な副作用の既往のある患者
- ⑨ 活動性の高い症例、重労働に従事している患者
- ⑩ 歩行時等に手術側で杖などを使用し手関節に過度のストレスがかかる患者

3. 実施者および施設基準

- ① 日本手外科学会専門医
- ② RA手関節を含む手関節疾患に対する標準的な手術経験がある
- ③ 後に定める手術手技講習会もしくは e-learning を受講したもの
- ④ 人工関節登録制度の施設IDを取得している施設

日本手外科学会学術集会等

◆第60回日本手外科学会学術集会◆

会 期：平成29年4月27日(木)～28日(金)
会 場：名古屋国際会議場
会 長：平田 仁(名古屋大学大学院医学系研究科 運動・形態外科学 手の外科)
詳 細：<http://www.jssh2017.jp/>

.....

◆第55回手の先天異常懇話会◆

会 期：平成29年4月28日(金) 17時15分～18時15分
会 場：名古屋国際会議場
主 管：日本手外科学会 先天異常委員会

.....

◆第23回春期教育研修会◆

会 期：平成29年4月29日(土) 8時30分～16時(開場8時)
会 場：名古屋国際会議場
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse.html>

※今年はWeb春期教育研修会は開催されませんので、ご興味のある方はぜひご参加ください。

.....

◆第3回カダバーワークショップ◆

会 期：平成29年9月7日(木)～8日(金)
会 場：札幌医科大学
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会

.....

◆第23回秋期教育研修会◆

会 期：平成29年9月9日(土)～10日(日)
会 場：北海道大学
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会

関連学会・研究会のお知らせ

◆第60回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：平成29年4月12日(水)～14日(金)
会 場：大阪国際会議場(グランキューブ大阪)
会 長：細川 亙(大阪大学医学部形成外科)
詳 細：<http://www2.convention.co.jp/jsprs60/>

.....

◆第29回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：平成29年4月28日(金)～29日(土)
会 場：名古屋国際会議場
会 長：茶木 正樹(中日病院 名古屋手外科センター)
詳 細：<http://meeting29.jhts-web.org/>

.....

◆第90回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：平成29年5月18日(木)～21日(日)
会 場：仙台国際センター、東北大学百周年記念会館(川内萩ホール)、せんだい青葉山交流広場
会 長：井樋 栄二(東北大学大学院医学系研究科外科病態学講座整形外科学分野)
詳 細：<http://www.joa2017.jp/>

.....

◆第30回日本臨床整形外科学会学術集会◆

会 期：平成29年7月16日(日)～17日(月・祝)
会 場：京王プラザホテル
会 長：子田 純夫
詳 細：<http://jcoa30.umin.jp/>

.....

◆第28回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：平成29年8月25日(金)～26日(土)
会 場：ウインクあいち(愛知県産業労働センター)
会 長：平田 仁(名古屋大学大学院医学系研究科 運動・形態外科学講座 手の外科学)
詳 細：<http://www.handfrontier.org/jpns28/>

◆第26回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成29年10月19日(木)～20日(金)
会 場：ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター
会 長：磯貝 典孝(近畿大学形成外科)
詳 細：<http://convention.jtbcom.co.jp/jsprs26/>

◆第32回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成29年10月26日(木)～27日(金)
会 場：沖縄コンベンションセンター
会 長：金谷 文則(琉球大学大学院医学研究科 整形外科学講座)
詳 細：<http://www2.convention.co.jp/joakiso2017/>

◆第44回日本マイクロサージャリー学会 学術集会◆

会 期：平成29年12月7日(木)～8日(金)
会 場：シーガイアコンベンションセンター
会 長：多久嶋 亮彦(杏林大学医学部形成外科学)
詳 細：<http://jsrm44.umin.jp/>

◆第28回日本小児整形外科学会◆

会 期：平成29年12月7日(木)～8日(金)
会 場：京王プラザホテル
会 長：高山 真一郎(国立成育医療研究センター臓器・運動器病態外科部)
詳 細：<http://www.jpoa.org/congress/>

編集後記

de Quervain病の診断にEichhoffテストがあります。私が整形外科医になった頃はFinkelsteinテストとして知られておりました。標準整形外科第9版まではFinkelsteinテストと記述され、2008年4月発行の第10版からEichhoffテストに改められました。FinkelsteinテストがEichhoffテストに変わったと認識している整形外科医もおられますが、Finkelsteinテストも存在します。

先日、上腕骨外側上顆炎の診断として有名なThomsenテストの語源を調べました。手外科シリーズ「テニス肘」にも記載されており、一般の方も数多くみられていることと思います。しかし、Thomsenテストの詳細が記載されていると思われる論文は国内に貯蔵されておらず、手外科医が参考にしていく洋書にはThomsenテストの記述がありませんでした。

整形外科医が当たり前と思って認識していることも、語源をたどると間違っていることもあり、先人の残したものを正確に後輩に伝えていかなければならないことを再認識しております。現在手外科シリーズNo.30「握り母指」とNo.31「斜指症」を作成中ではありますが、広報渉外委員会では現行の手外科シリーズ全ての見直しを検討しております。

(文責：佐竹寛史)

広報渉外委員会

(担当理事：平瀬雄一，アドバイザー：千馬誠悦，委員長：白井久也
委員：磯貝典孝，岡崎真人，佐竹寛史，辻 英樹，日高典昭)